



情報共有シートなどを紹介する居澤さん(右)と近田さん(豊川市で)

豊川の施設に読売療育賞

「できること」に注目 情報共有シート 評価

重症心身障害児者施設で働く職員の優れた実践研究を表彰する第20回読売療育賞(読売光と愛の事業団主催)に、豊川市の信愛医療療育センターが選ばれた。障害がある人や子供が「できないこと」ではなく、「できること」に注目したい。こんな思いで職員が作成した情報共有シートなどが評価された。

同センターは2017年に開所し、主に重度の肢体不自由と知的障害があり、医療的ケアが必要な人を受け入れている。在宅生活が難しい人の生活の場でありつつ、短期入所も受け入れ、外来診療も行っている。

読売療育賞は最優秀の施設に贈られる。臨床心理士などの資格を持ち、同センターで心理の専門家として働く居澤朋子さんと近田朋恵さんの2人の研究発表が評価された。

同センターでは情報共有シートに、手や足、口が「どの程度動くか」といったADL(日常生活動作)を記

録する。

一般的な記録では「寝たきり」「足は全く動かない」といった評価項目が並ぶ。2人は「できる状態が目に見えなくても課題」と考え、「わずかに足の動きがある」「人の声に反応してまばたきがある」――などの項目を評価、記載することとした。

利用者の特徴を見いだそうと、基本的習慣として「好きなものを見ると動きが活発になる」などの項目を新たに設けた。自由記述欄も設け、「アニメをよく見ている」「足をくすぐるとうれしそうな表情」などと具体的に記載。シートは看護師らほかの職員と共有し、家族にも示しているという。

シートとは別に、1日の生活の流れ、本人と家族の願い、各担当専門職員の目標を記載した「生活表」も作成。利用者が過ぐる部屋

に掲示し、家族らが見られるようにした。

2人は研究発表で一連の実践を振り返り「通院や入院時、家族に安心してもらえた。利用者の特性を新たに発見でき、療育に生かすことでQOL(生活の質)の向上につながった」と指摘。2人は今回の読売療育賞を「利用者のみならず一緒に受賞できた気分。とてもうれしい」と喜んだ。